

# IS の登場と「イスラーム政治」の変容

北澤 義之

## The Rise of IS and the Issue of 'Islam Politics'

Yoshiyuki KITAZAWA

### はじめに

IS<sup>1)</sup>の登場は、国際社会に強い衝撃を与えた。それはこの集団がイラク（後にはシリア）という主権国家内に一方的に「イスラーム国」の設立を宣言し、この「国」の影響下に入った住民で協力しない者や「異教徒」特にヤジード教徒<sup>2)</sup>の住民を大量に殺害し「奴隷」にし、斬首された犠牲者の遺体の映像を SNS で流し、近隣住民を恐怖に陥れ、多くの難民を発生させたからである。また、IS に共鳴しそこに移住する「外国人」の存在<sup>3)</sup>、それに同調する中東やアフリカ、欧米諸国における同調者のテロ事件は、IS の規模や行動範囲に関する実態把握をより困難にしている。このように実像の分からない暴力的な集団に対応するため各国は危険を防ぐために考えられる最大規模の治安措置をとることになり、それが国際関係のセキュリティー化 securitization<sup>4)</sup>を招くことを警戒する議論もある。

事態に適切に対応し過激主義の拡大の背景を明らかにすることが必要である事は論を俟たない、しかしそれに適切かつ効果的に対応するには、IS の主張はどのようなイスラームの主張に基づくのか、それは正統・主流のイスラームの立場とどう重なりまた異なっているのか、近代の他のイスラーム政治組織の系譜の中ではどう位置づけられるのか、一般のムスリム大衆からはどう見られるのか、といった問いに答えつつ、IS の地域に及ぼした多様な政治的影響について考察することが求められている。本稿ではそのための準備的作業として、IS の組織的背景、その主張（特にバグダーディー）の主旨、イスラーム政治の文脈における位置づけ、そして国際政治とりわけ中東の域内情勢への影響に関する課題を整理することにある。

## 1. 実体・組織としてのIS

### (1) IS 設立の政治的契機

IS 成立の契機は、中期的には 1991 年の湾岸戦争とそれをめぐる湾岸諸国の安全保障体制の変化、それに伴う国内の変動がアルカーイダに代表される新たなイスラーム主義者を中心にした反体制勢力の拡大を招いたことであった。直接的には 2003 年のイラク戦争によるサッダーム・フセイン体制 (1979-2003) の崩壊、占領当局 CPA<sup>5)</sup> による脱サッダーム・脱バース党体制志向に基づく徹底的なパージが、相対的に多数を占めるシーア派の政界における台頭をよび、また少数ながらサッダーム時代からアメリカの支持を得ているクルド人の自治権の拡大につながり、これが旧バース黨員のみならずイラク中部に多く居住するスンニー派住民の不満や不安を煽り、「宗派对立」的な状況を現出したことがある<sup>6)</sup>。IS の直接的なルーツとしては、アブー・ムサブ・ザルカーウィー<sup>7)</sup> が 2002 年から 2006 年にかけてイラクで率いた「一神教とジハード」Tawhid wal Jihad および「二大河の土地のアルカーイダ」(AQI) と称するグループであろう。ザルカーウィーは新たな民主主義体制下における上記のようなシーア派住民やクルド人の地位向上とは対照的に悪化しているスンニー派や旧バース黨員の現状への不満を利用したものと思われる。しかしザルカーウィーの死後、残りのメンバーがイラクにおけるイスラーム国と名称を変更したが、それほどの影響力のないまま命脈のみ保っていた。その後のアルカーイダ本体との関係は不透明であった。その間マールク首相の下に国内統一や治安対策が一時的に功を奏したことも影響力の低下に影響した<sup>8)</sup>。

イブラヒーム・アワド・イブラヒーム・アルバドリー・アルサマツラーイー (通称アブー・バクル・アルバグダーディー、以下バグダーディーと表記) やターハー・スブヒー・ファラーハ (通称アブー・ムハンマド・アルアドナーニー) 等が中心になって、「イラクのイスラーム国」は 2010 年ごろから組織の拡大を図り、2013 年初頭には、イラク国内において多くのテロ攻撃を行い、シリアにも活動の範囲を広げていった<sup>9)</sup>。2013 年 4 月にはバグダーディーは自らの組織とシリアの勢力の合併を宣言した。シリア側の勢力は実質的にはシリアのアルカーイダ系グループである「ヌスラ戦線」<sup>10)</sup> であった。こうしてイラクとシリアのイスラーム国が成立したのである。しかしこの合併に対して、本来「ヌスラ戦線」を率いていた指導者もアルカーイダ本部も反対した。IS はアルカーイダ本部のアイマン・アルザワーヒリーの警告にも応じなかったため、2014 年早々 IS の成立を認めず、アルカーイダの支部ではないとの公式の発表を行うに至った。

こうしてアルカーイダとも一線を画した IS は改めてイラクとシリアの名前を外して、「カリフ国」を宣言し、指導者であるバグダーディーをイスラーム世界の「カリフ」と宣言した。IS はバグダーディーが「勤勉なシャイフ (指導者) であり、イスラームに造詣が深く、行動的で、敬虔であり、戦

士であるとともに改革者であり、かつ預言者ムハンマドの一族出身である」として、十分にカリフの資格があると称えている。その上で、ISは歴史的なカリフ国の要請のいくつかのものを適用し、それこそがその行動の宗教的正統性であると主張するのである<sup>11)</sup>。

しかしこのようなISの宣言は、イスラーム学者やイスラーム世界からの批判・反発を引き起こしている。まず、著名なイスラーム法学者のグループが「誰があなた方（IS）にウンマ（イスラーム共同体・イスラーム世界の意）に対する権限を与えたのか。あなた方のグループが与えたのか。もしそうだとするなら、わずか数千人に過ぎない集団が自らを15億は存在するムスリムの指導者として任命したことになる。」と問いかけた<sup>12)</sup>。さらに批判的な意見の代表例としては、以下のような批判がある。

もしあなた（バグダーディー）が自分たちをムスリムだと考える15億の人々を認めるのであれば、あなたはあなたの主張するところのカリフ国に関する相談をしないというのはどうしたことなのか。ここで、あなたには二つの結論の可能性がある。一つは彼ら（15億の人々）はムスリムであり、彼らはあなたをカリフに任命していないということであり、その場合あなたはカリフではない。もう一つの結論は、あなたが彼ら（15億の人々）がムスリムであると認めないことであり、その場合ムスリムはカリフを必要としないぐらい小さな集団に過ぎなくなる。いずれにしても「カリフ」という言葉がどうしても必要になるのだろうか。実際には、カリフ国はムスリム諸国、イスラーム学者の組織、地球上のムスリムの合意によって出現すべきなのだ。

なお、筆者自身が、アラブ諸国で聞いた一般のムスリムの多くの考えでは、問題はあるにしても現実にそれぞれのアラブの国の政治・経済・社会を実際に動かしているのは、ムスリムであってその上になぜ他のイスラームの権威を置く必要があるのかという、現実的な立場があることが看取された<sup>13)</sup>。その一方で、アルカーイダを含むジハード主義者にしても、最終的にカリフ国制度を拒否はしていないものの、バグダーディーをカリフと認め、その指導の下に置かれることを明確に拒否している。すなわち、一般のムスリム社会や極端なジハード主義者の足並みもそろっていないのである。

## (2) ISの「国家」運営

ISは、イスラーム法（シャリーア）によって統治し、その領域を拡大することを目指している。指導者であるアブー・バクル・バグダーディーがカリフとしてイスラーム国家たるISを運営するというスタイルをとっている。カリフはイスラームの預言者ムハンマドの後継者を意味し、宗教指導者が政治指導者として行動するという政教一致の「理想」につながる。カリフ位が支配したのはアッバース朝（8世紀～13世紀）までであったが、イスラーム圏が拡大し、イスラーム圏各地の政治権力

の自立性が高まり、カリフを中心とする宗教的権威が現実政治の全てを管理する厳密な政教一致の体制は維持されなかった。

ISでは「イラクのアルカーイダ」のメンバーが中心となり、旧バース党指導者や軍関係者、IS支配地域のスンニー派住民で初期においてISと土地の利用などに関する契約を結んだ者が参加していたが、いずれも、シーア派主導の政治体制に不満を持ちマリーキー首相の退陣を求めている。これにISに同調して当地に来た「外国人」が加わったが、ISの支配を嫌うその他の住民、特にスンニー派以外のマイノリティは難民化した。シリアにおいては「ヌスラ戦線」のメンバーでISとの連合に合意した者が参加し、反アサド派のイスラーム政治勢力や「自由シリア軍」など世俗派の反体制勢力から転身するケースも見られる。アサド政権を支持せずISの支配も受け入れない住民は安全を確保することが難しく、これも難民化している。しかしイラクでもシリアでも現在ISの支配地域に残っている住民はISと一枚岩ではない。特にイラクにおいては、当初の目的であったマリーキー首相の退陣という目的は一応達成され、またISの支配状況にも陰りがみえていることから、今後とも協力関係が続くという確証はない。

ISはシャリーア法廷によって裁き、法を犯した者は石打ちや手足切断の刑などを含むハッド刑（固定刑）を科し、その映像をSNSで拡散している。しかし、イスラーム諸国でもハッド刑を取り入れている国はきわめて少ない<sup>14)</sup>。さらにISは支配地域のイスラーム教徒にはザカート税を課し、キリスト教徒やユダヤ教徒にはジズヤ（人頭税）を課している。また奴隷制<sup>15)</sup>を復活させると宣言している。捕虜の扱いは、「伝統的」なやり方によって、改宗か、殺害か、奴隷か、交渉の材料かという対応をしている。言うまでもなくイスラーム圏において主権国家レベルで現在でも奴隷制を受け入れている国はない。

世界観としてはイスラームを受け入れた「イスラームの家<sup>16)</sup>」（ダール・ルイスラーム）とイスラームの教えを受け入れず混乱に満ちた「戦争の家」（ダール・ルハルブ）という二分法を用いている。このような世界観はイスラームでは一般的なものである。しかしムスリムが多宗派を占める地域において、他の少数派を異教徒として排斥するという事は異常なことであり、中東やその他の地域におけるムスリムは異教徒との共存を受け入れてきた。イスラームの立場からは「戦争の家」である他地域に関しては、ほとんどのイスラーム教徒は現実を受け入れ、イスラーム以外の文化とも交流してきた。イスラームがキリスト教に次ぐ世界宗教として拡大してきた背景には、イスラーム圏の内外における他の宗派・コミュニティとの調和を受け入れてきたことがあった。しかしこれに対して、ISは領域内に不信仰者を容認しないという対応をする。ヤジード教徒に対する非人道的な処遇にもそれは表れている。この対応に関してはシャリーアの解釈にもよるが一般的な対応ではなく極端な対応であることは明らかである。

対外戦略は、これまで各国の社会において何らかの不満を持ちISに共感を示すローンウルフ（単

独犯)のテロ行動を追認することで組織の実態の把握を困難にするだけでなく、実態より組織を大きく見せる効果を狙っていたものと思われる。これはアルカーイダなどが使う手法と同様である。しかし2015年11月のシナイ半島、バイルートやパリでのテロ事件によって、直接関係のあるメンバーと事前に連絡したうえで不特定の相手に対するテロを起こす対外攻撃へと変化しつつあるという見方<sup>17)</sup>もある。

## 2. 「イスラーム組織」としてのIS

### (1) 一般的イスラームとの距離

ISとイスラーム一般の信仰・慣行との違いはどのあたりにあるのだろうか。

バグダーディーはモースルでの説教では、以下のように述べた。

わたしはあなたがたの監理者にすぎず、あなたがたよりも優れているわけではない。もし、わたしが正しいと思えば、助けてください。もし、間違っていると思えば、忠告し、正して、わたしに従ってください。もし、わたしがアッラーに背けば、私に従う必要はない。わたしは、王や為政者たちのように臣下のものたちに贅沢や安全、安逸を約束するわけではない。ただ、アッラーがその信徒たちに約束したことを約束するだけ<sup>18)</sup>。

この一文を見る限りでは、カリフ位の復活そのものをめぐる議論をさておけば、イスラームの指導者は信徒の同意によってその地位を保証され、その指導者としての地位は固定的なものではありえないというある種の緊張感を前提にした(スンニー派的な)イスラームの指導者の立場をめぐる伝統ののりつた認識が示されている。

ところで、ISのシンボルとなっている黒地に白い文字で書かれた旗には、まず「Allahのほかには神なし」という意の一文が書かれているがこれはシャハーダ(信仰告白)として知られ、一般にイスラーム教徒は必ずこの言葉を唱えることになっている。さらには他の中心の上からアッラー、ムハンマド、ラスールと書かれている。アッラーは言うまでもなく唯一神の名前であるが、これは英語で表現するならばthe godであり、いわば一般名詞を固有名詞として使用しているわけである。黒地の旗は、預言者ムハンマドが使用していた旗が黒地であったという昔のイスラームの伝統ののりつたものである。これを掲げることはイスラームの信者としては特別変わったことではなく、過激でも、特殊でもない。ただ1990年代あたりから過激な行動で知られるジハード主義者がシンボルとして使用するようになってきている。

## (2) サラフィー主義

中東をめぐる政治運動の文脈から見るとISのルーツの一つは、サラフィー主義<sup>19)</sup>に求められる。イスラームの主流を形成するスンニー派においては、9世紀に聖典であるクルアーンや預言者ムハンマドの言行(スンナ)の記録であるハディースの法的解釈が禁じられた<sup>20)</sup>。サラフィー主義は反帝国主義の文脈で、抵抗の基盤としてイスラーム的価値の尊重・再評価をめざしたが、主張のなかには単なるアナクロニズムではなく、現実主義的な側面も見られた。ISの活動の中で見られる「イスラーム的統治」はサラフ(初期イスラームの先達)の伝統を踏襲しようとしているが、形式的な理解によりそれが教条的かつ狭量な統治姿勢、異教徒への攻撃的な対応などに表れており、近代のサラフィー主義者の示した柔軟性や現実性は見受けられないように思われる。近代のサラフィー主義者は、サラフの行動の精神や原理を見極めて現実に対峙しており、例えば西欧の制度に対してその導入がイスラームの精神に反しないで役に立つものであれば、手段として積極的に受け入れるという判断を示したのに対し、ISはサラフの行動や形式そのものに囚われた判断を下すのでサラフの時代には存在しなかった西欧近代の制度は頭から否定・排除する対応をするのである。

## (3) ムスリム同胞団

ISの政治へのかかわりを位置づけるために、現代政治とイスラーム政治運動の関係に影響を与えたエジプトのムスリム同胞団の活動を見るのが参考になる。ムスリム同胞団は、サラフィー主義の影響を受けつつ、イスラーム的価値に基づいて国内政治の改革、英国などによる帝国主義支配からの脱却を主張し、西欧の影響による文化的頹廢の解消をめざして組織的活動を展開した。これは、90年の時代的相違はあるにせよ、ISがイスラーム圏であるイラクやシリアからの欧米の政治的・社会的・経済的・文化的影響の排除を目指す点に関しては、類似点(行動主義)を見ることができる。しかし、イスラームの進行に関する極端な純粋主義や教条性に関して、またナショナリズムやそれに基づく国民国家制度、それに基づく国際制度に対する強い拒否の姿勢に関しては、ISとムスリム同胞団には大きな違いがみられる。

ISの現代のナショナリズムを基盤にした国民国家システムに関する立場を考えるうえで、バグダーディーの以下のような演説が参考になる。

カリフ国家の崩壊後、ムスリムたちは敗北した。……ムスリムたちは今、国家とカリフ制をもち、それはコーカサス人、インド人、中国人、シャーム人、イラク人、イエメン人、北アフリカ人、アメリカ人、フランス人、ドイツ人、オーストラリア人を結びつけている。……ムスリムたちよ、あなたがたの国に急げ。シリアはシリア人だけのものではない。イラクはイラク人だけのものではない。地上はすべてアッラーのもの。国家は全てのムスリムたちのためのもの。世界中のムス

リムたちよ、ヒジュラ（移住）ができるものはイスラーム国にこい。イスラームの土地への移住は義務である<sup>21)</sup>。

ムスリム同胞団の創始者であるハサン・バンナー<sup>22)</sup>は、英国の保護国的状態におかれたエジプトにおいて1920年代からイスラームの原則に基づいて、エジプトの完全な独立を目指して社会改革や英国の影響力の排除をめざす政治運動を展開した。その中でエジプトを含む世界の国家体制が西欧起源のナショナリズムに基づくものであることを認識しつつも、ナショナリズムがエジプトの自立につながることに関してはイスラームの精神に反しないとの立場から受け入れ、また政治改革についても提案を行うなど現実的姿勢を示した。バンナーはカリフ制の復活やイスラーム世界の協調については歓迎しつつも、あくまでも段階的にそれを達成するために現実と向き合い漸進的に目的を達成することを主張した。これに対して、ISは民主的な政治を支持し、選挙に参加すること自体をシャリーア以外の人間の作った法に従い本来のイスラームの信仰に反する行為と見なすのである。

バグダーディーの主張には、一方的に宣言したカリフ国を現実のものとして、現行のシリアやイラクの国民国家としての存在やそれを前提とする国際社会の現実を無視し、その論理でムスリムに移住を呼びかける（その実現の手段は非合法的な行為と暴力を厭わないことが含意される）という一方的な考え方に基づいている。サラフィーの思想の中にはムスリムがイスラームの信仰を全うしきれない環境にいると考える場合には、その場所から信仰を全うできる場所に移住することを推奨するという発想があるが、それに従った主張かと思われる。同胞団との関連性で見ると、バグダーディーの立場はバンナーの暗殺後に同胞団を指導したより原理主義的なサイド・クトゥブ<sup>23)</sup>のそれに近いかもしれない。

#### (4) イラン「イスラーム」革命との相違

第二次世界大戦後、国際政治におけるイスラームの存在を印象付けたのはイランのイスラーム革命であるが、国際的な影響力に関して注目度の高いISとの関係性はどうか。まずイランの場合はシーア派の宗教指導者によるものであるが、ISはスンニー派でありアルカーイダや、むしろシーア派を異端とみなすサウジアラビアのワッハブ派と親和性の高いものである。それ以上に、復古主義的に見なされがちなイランの体制は、イスラーム共和制である。すなわち西欧的な制度である憲法に基づく民主主義的議会制を導入し、三権分立の国家体制を維持しつつ同時にイスラーム指導者がそれをイスラーム的な価値に基づくように監督・運用するという独自の体制を作った。イランの革命政府は欧米に対して挑戦的な姿勢が際立ってはいたが、国連を中心とする国際秩序そのものを否定はせず、既存の国際秩序（国家・国境・法）を前提に行動していた。

これに対しISは、民主主義的制度だけでなく国民国家制度やそれを前提とする国際システムその

ものを、イスラーム的概念とは無縁のものとして拒否する姿勢を見せている。例えば先述の移住にしても、そのプロセスにおける国際的ルールなどに関しては全く無視している。国際社会は国際秩序にとっての脅威としてのイスラーム政治勢力という認識で、全てのイスラーム組織を同一視する罠に陥らないようにする必要がある。

#### (5) 国際フェデーション活動

ISだけでなくアルカーイダなどの国際的な暴力を伴う目的達成のイメージや条件が形成されるきっかけとしては、アフガン事件に際しての国際的武装フェデーション活動の容認・育成があった。イスラーム革命後のイランに対する厳しい制裁とは対照的に、サウジアラビアなどからの国際的な武装イスラーム義勇兵は歓迎された。例えば、CIAによって建設されたゲリラ訓練施設が現在も存在すると言われ、これがアフガニスタン国外におけるテロ事件に結びついているとの指摘がある<sup>24)</sup>。

それ以上にイスラームの大義のために武装したイスラーム教徒が国際的に容認されたことが、社会に不満を持つ特に若いムスリムの間に、いわば、国際的「イスラーム聖戦レジーム」が存在するかのような幻想を与えることにもなったのではないかと思われる。しかし、アフガニスタンの内戦が終結すると、帰国した「アフガン帰還兵」は国内の改革を今までの流儀で達成しようとする、危険分子として扱われ国外に活路を求め、チェチェン紛争、ボスニア紛争、イラク、シリアなどに参入するようになったのである。ここまでは、アルカーイダの背景と重なるが、ISをISたらしめたのが、前者がカリフの復活を望みつつも条件を整える方に力を注いだのに対し、ISはさまざまなローカルな現実や条件を利用しつつも無視してカリフ国という既成事実を作り、それを出発点にして現実をそちらに合わせようと行動している点である。

#### (6) その他のISの特異性

イスラームにおける「政教一致」は一般にも知られている。イスラーム史では、預言者ムハンマドがメッカにおいて平等・公正の原則に基づくある種の社会運動を展開したので、メッカを追われることになり<sup>25)</sup>、近郊のメディナに迎え入れられると、政治指導者としての役割と宗教指導者の役割を同時に担うことになった。ムハンマドの教友であった後継者である正統カリフの時代(632-61)にもこのスタイルはほぼ踏襲されアッバース朝の途中まではカリフによる統治も実践されたが、その後カリフの地位は世界化するイスラーム世界での政治的影響力を失っていった。

現代ではいわゆるイスラーム諸国においても完全な政教一致が展開されている国は存在しない。確かにオスマン帝国の後継国であり国民のほとんどがムスリムであるトルコが政教分離を宣言し憲法にそれを明記したことを除くと、大部分のイスラーム諸国は明確にはイスラームの影響を排除しておらず、法源をシャリーアにおいている国も多い。しかしながら、「イスラーム革命」によりイスラーム



共和制という政治体制をとっているイランでさえ、実際には現実政治に接合しつつ部分的にイスラーム的判断に基づく修正を施している。このような状況下でカリフ制を実践しようとする点が際立っている。

またISが過度に狭い意味でのジハードを重視する点が際立っている。ジハードとは本来、ムスリム個人がイスラームの信仰を守るための「努力」を意味しているが、その中にムスリムの共同体が外部からの侵略によって危機に直面した時にそれから共同体を守るために戦うことも義務とされているため、「聖戦」の意味を持つこともある。すなわちイスラーム教徒の共同体防衛の時に「聖戦」が義務化されるのであり、それゆえアフガニスタンに侵攻したソ連軍と戦ったムスリムがムジャーヒディーン（聖戦を行う者）を名乗るのである。一般的なイスラームの判断では、ムスリムもいるとは言えイスラーム圏に入らないヨーロッパなどでの暴力行為は聖戦から外れるはずである。他のジハード主義団体にもみられる特徴であるが、ISのジハードの乱用は突出している。

そして他のイスラーム教徒の殺害は禁じられているがISは多くのムスリムを殺害している。イスラーム法に反しないようにするには、他のムスリムを背信者・棄教者（ムルタッド）と認定する行為、すなわちタクフィールを行う必要がある。しかし現実にはISに抵抗するムスリムと戦い、殺害する場合も多いことを考えると、実際にISがイスラーム法に反する行為に及んでいるという非難も可能である。またムスリムが自らの都合で他のムスリムに対し頻繁にタクフィールを行うことに関しては、ISの関係者の中でも議論<sup>26)</sup>があるようだ。

### 3. 国際政治への影響

IS問題をめぐる最後の局面として、この組織の活動が国際政治においてどのような波及的影響を及ぼしているのかを、中・長期的な国際政治における「イスラーム政治」問題への影響、短期的な国際関係全般への影響、ISの周辺アラブ諸国の内政への影響の3局面に関して今後どのような論点があるのかについて言及しておきたい。

#### (1) イスラームの国際政治問題化

欧米諸国、特に米国の第二次世界大戦後の対外政策に宗教の政治関与という点で大きな影響を与えたのは、イラン革命（1979）であり、ソ連のアフガニスタン侵攻を契機とするアフガニスタン内戦（1979）がある。前者は親米的な前政権が反米的なイスラーム政権に変わったことによる、米国にとっての安全保障・対外政策上の脅威に関係している。後者は西南アジアの親米的体制のパキスタンの影響を受ける隣国アフガニスタンが共産主義勢力により侵略され脅威にさらされたことへの対抗手段として、アフガニスタンの武装した部族勢力を中心とするムジャーヒディーンやこれに協力する国

際的なムスリムの義勇兵の抵抗を支援したケースである。同時期のイスラーム圏における政治的事件をめぐり、片や脅威としてのイスラーム的政治実体（イラン）に対峙しながら、共産主義勢力の影響力拡大というなじみのある脅威（ソ連）に対抗するために国際的なイスラーム教徒の戦いを支援するということから、イスラームは米国や西側諸国の安全保障や対外政策にかかわる実体として扱われることになった。これがイランとは別の形でイスラームを政治や権力の柱とするサウジアラビアへの米国の寛容な対応に示される二重基準の問題とも相まって、イスラーム政治勢力・イスラーム圏そしてイスラーム・イスラーム教徒への対応という一般的問題にもつながる国際政治上の重要な（特に冷戦後は中心的な）イシューとなっていった。

これは 2001 年の事件を頂点に、ブッシュ政権による「対テロ戦争」さらにはイラク戦争（2003）へと国際的な緊張を広げていくことになった。安全保障上の脅威としてのイスラームは、関係主体のイスラームという対象への対応の軸が定まらないこと、それによって対象を必要以上に巨大な実体と位置づけることによる新たな問題の創出<sup>27)</sup>が考えられる。これは軍事的手段による大国の抱えるイスラーム問題の連動という新たな国際政治上の「磁場」をもたらす。多くは本来宗教問題という単純なくくりではなく、少数民族・マイノリティ問題やグローバル化した世界における国民国家の統合維持の中で周縁化された集団の問題ともかかわる問題を宗教問題に矮小化することが政治的ゲームの中で影響力を持つことに関する問題群である<sup>28)</sup>。

## (2) IS をめぐる国際関係の複雑化

### a) トルコ局面

トルコは、主に水問題、クルド人の問題がイラクやシリアとの関係を規定してきた。しかし IS が登場してからは、IS 問題と連動したクルド諸勢力との対応という問題だけでなく、イスラームの国際問題化の状況下で、政治的には中道右派であり同時にイスラーム主義的傾向も持つ公正発展党による現政権の政教分離を国是とするトルコ内政上の立場などにも微妙な影響を及ぼす可能性がある。さらに IS をめぐる国際的な対応の中で、難民問題や国境管理の問題をめぐりシリアのアサド政権との対立、そのシリア政府を擁護する立場から軍事介入を決めたロシア戦闘機の撃墜問題<sup>29)</sup>をめぐる二国間対立が問題化している。

しかし、域内の国際関係や内政・安全保障にかかわるのは、クルド問題である。トルコは長年、独立を目指すクルド労働者党（PKK）を内政・国民統合への脅威とみなし、時として隣国への越境攻撃を含む強硬な手段で活動を抑制しようとしてきた。近年は人道的観点からの国際社会との関係を意識して、平和的手段による対応にシフトしており、当初 IS との対抗関係の中で PKK の対 IS 活動を容認する姿勢を見せていたが、最近では PKK が存在感を見せ始めるとむしろ警戒感を強めている。

## b) イラン局面

イランは中東域内において存在感を示し始めている。他方、IS問題に関してアラブ諸国は受け身の対応が目立っている。当初、シリア内戦に関してはアラブ連盟が、国際社会と連動して仲介の労をとろうと試みたが失敗すると、その後のISの台頭に対して有効な対応をとれていない。イランは1979年以来、当初の「イスラーム革命の輸出」の言説に代表される攻撃的な対外政策によって、米国を筆頭に「イスラーム政治」の脅威を警戒する国際社会においては孤立し、21世紀初めには核開発問題をめぐって米国やイスラエルの軍事的手段をもにおわせる厳しい圧力を受けた。

しかし域内においては、8年にわたるイラン・イラク戦争後、革命の輸出先とした湾岸アラブ諸国との関係を徐々に修復し、経済的関係を軸に交流を深めた。さらにイランはシリアのアサド政権との特殊な交流関係を維持し、レバノンのイスラーム政党ヒズブッラーを通じてレバノンの政治にも影響力を持つに至った。そして湾岸戦争・イラク戦争を経てイラクにおいて多数派であるシーア派住民が政治的な影響力を増すと、シーア派の大国であるイランの存在感がさらに強くなった。また「アラブの春」を経て保守的な湾岸諸国内部での政治改革を求める動きの中で、湾岸諸国のシーア派コミュニティの動きが注目されるとイランの存在は湾岸アラブ諸国にとって警戒すべきものと映るようになる。イランは2015年には核開発問題をめぐり国際社会との一応の合意を達成し安定を得た上に、ISの台頭による混乱に際して、クルド人組織のライバルとしてイラクの一部地域では実際にISに対抗するシーア派民兵組織の活動にも関与しているとの観測もある。

## c) サウジアラビア局面

サウジアラビアはイランでイスラーム革命が起きるまでは、イランとともに米国の湾岸政策の二つの柱と位置づけられていた。イランはシーア派でありサウジアラビアはスンニー派であったがいずれも米国にとって友好的な穏健勢力とみなされていた。イランの体制が変わるとサウジアラビアは保守的ながら親米的な産油国であり、アラブ諸国内の左派や急進的民族主義勢力に対する歯止めとしての役割を期待された。イスラームの観点からみると確かにシーア派のイランは急進的な改革を志向し、反米的でもあり、米国にとっては危険な存在であった。しかし厳格なワッハーブ派の協議に基づくサウジアラビアの宗教政策も自由や民主主義の立場から見ればむしろイラン以上に米国のよって立つ価値とは矛盾していたが、この点は看過されていた。

しかしこのような保守的な体制は、内部からの批判に直面することになった。アフガニスタンでの国際的「イスラーム的解放運動」に参加した経験を持つ者にとって、湾岸戦争を独裁体制とはいえムスリムを攻撃した米国など多国籍軍やそれに聖地メッカとメディナを擁するサウジアラビアの土地を提供することを認めた体制に対する批判が向けられた。その一人がビンラーディンであり、9.11のテロ事件の背景には以上のような事情があった。シーア派の革命で米国への脅威となったイランへのカ

ウンター・バランスでもあったサウジアラビアが、今やいわば米国にとってのスニー派の脅威を生み出しつつあった。このような変化の中でサウジアラビア王制は、対テロ戦争への協力を求める米国に追従し、イラク戦争時にも基地の提供に協力したのである。スニー派の過激派とも言えるISに対しては、多額の資金がサウジアラビアから流れたことが分かっている。その後、サウジアラビア政府はこの資金の流れを断つ措置をとっているが、同国にはこのような過激派への支援という形で現状への不満を表明する勢力が存在することが内政上・域内政治上、どのような意味を持つかは今後十分検討する必要がある。

また、アブドッラー国王の死去を受けて2015年1月にはサルマーン国王が即位したが、10月にはシーア派の部族ホーシー派の内乱により混乱状態のイエメンに対してサウジアラビアが率いるアラブ諸国連合軍の戦闘機が攻撃を加えた。イエメン政府からの要請という形ではあったが、シーア派の反政府勢力であった点が注目される。2016年1月には、サウジアラビア国内のイスラーム過激派メンバーとともにシーア派の指導者を処刑し、これに対しイランが強く反発し、国交が断絶される事態に至っている。うがった見方をすれば、今回のサウジアラビアの対応をめぐる、このような事態の展開はある程度予想できることであり、その後の事態の展開によって湾岸におけるスニー派とシーア派の紛争という図式が強調されることは、今イラクやシリアで展開されている事態の争点（スニー派の極端主義としてのISの問題）をずらそうとしているのではないかということである。

### (3) 周辺アラブ諸国の内政への影響

ISをめぐる事態でまず全てのアラブ諸国につながる問題としては、改めて中東の国家の脆弱性であり、それはISが成立することを許してしまったイラクも内戦状態に陥ったシリアにも言えることである。何れもバース主義という強力なイデオロギーで上から統合している時代には盤石に見えた国家も、いったん綻びが見えると国家機構も、国民も改めて自力で統一性を取り戻すことが困難になっている。すでに内戦による国家分裂を経験し、現在はシリアからの難民が流入し厳しい状況にあるレバノンも、すでに存在するパレスチナ難民問題とも連動したシリア難民問題に直面している。

最後に「穏健派」として日本も中東外交上の友好国と位置付けているヨルダンの変化について触れておこう。ヨルダンはいわば安全な避難場所・緩衝地帯であった。しかしISによるヨルダン人パイロットの殺害以来、アブドッラー2世国王はISとの戦いでより積極的な姿勢を示している。ヨルダンには2015年ミラージュの派遣を表明したフランスに続いてUAEがF-16の飛行中隊を派遣することを表明している。またヨルダンは、南シリアの武装グループに対する部族のネットワークを使った作戦のセンターとなっている。

ヨルダンの積極化は、周辺のアラブ諸国の積極的行動を促しているようにも思われる。これまでは国際社会の危機感が先行している感さえあったが、地域国家が積極的に関与し始めている。2月には

エジプトはシナイ半島におけるイスラーム過激派への危機感を持ち、フランスとともに国連安保理にISへの対応策を協議するよう要請していた。そのエジプト軍は2月21日、21人のエジプト人殺害をめぐりリビア正規軍と共同でリビア国内のイスラーム過激派への報復的爆撃を行った。これは、ヨルダンのISに対する行動が前例としてこのような行動を促したという見方もある。

ISに対する米・英・仏の攻撃が継続する一方、米軍の戦車と装甲車とともに4,000人の戦闘員がクウェートの基地に派遣されており、それが展開される可能性がある。詳細は不明であるが、米国は過去には限定的な地上作戦を除いては地上からの介入は否定していた。ただ、今後の中東情勢を考える際に、対IS作戦の積極化をめぐって、これを機にナショナリズムを高めることで国内的な統一を固めようとするヨルダンやエジプトの事情をどう評価するのか、またイラク政府には外国軍の地上展開に対する国民のトラウマをめぐる危惧があることにも留意が必要である。

#### 4. 結 び

「アラブの春」は中東の国際関係に大きな影響をおよぼしたが、ISの台頭は中東だけではなく国際社会に多面的な影響を与えている。国際社会において、この組織の存在を擁護する者はイスラーム世界をはじめとして、皆無に近いだろう。ISのイデオロギーからは一般的なイスラームの多様性や寛容が欠落し、教条主義や強制が常態化されているからである。しかし、かといってこの組織を軍事的にせん滅することで（それ自体、困難だが）問題が解決すると考えることは楽観的に過ぎよう。そのためにはテロリストを生み出し、同調者を生み出す構造的原因を見出す努力が必要になる。その際、その原因をイスラームという宗教やそれが影響力を持つ中東やイスラーム世界固有の本質的な問題と切り捨てることは避ける必要がある。もちろん地域的・政治的な独自性や文化が影響している側面もありそれも無視することはできない。しかし対テロ対応では問題の根幹が広い意味でのグローバル化<sup>30)</sup>そのものと連動しているという一般的な認識のもとに、近年個別のテロ対応の試みがみられるアラブ連盟やOICなどの地域的・国際的な機関とも問題意識を共有しつつ、原因究明への努力が必要になるだろう。

## イスラーム政治と IS 成立の背景関連年表

アラブ	トルコ	イラン	その他
<p>ヒジュラ (622) (イスラーム政治の開始)</p> <p>正統カリフ時代 (632-661) (後世から理想的時代とみなされる)</p> <p>「イジュティハードの門の閉鎖」(9世紀) (除シア派・スーフィー) (イスラーム法の自由な解釈の停止)</p> <p><u>十字軍の侵入 (11-13世紀)</u> (ムスリムの「歴史的記憶」)</p> <p>イブン・タイミーヤ (13-14世紀) (後のサラフィー主義者により再評価)</p> <p><u>オスマン帝国 (1299-1922)</u></p> <p>ムハンマド・イブン・アブドゥル・ワッハーブの活動 (18世紀) (墓参禁止ムハンマド時代への回帰などを主張)</p> <p><u>帝国主義の影響 (19世紀)</u> (イスラームおよびナショナリズムによる抵抗)</p> <p>サラフィー主義 (J. D. アフガーニー、M. アブドゥー、R. リダーなど：イスラーム改革・純化)</p> <p style="text-align: right;">M. イクバル (インド)</p> <p style="text-align: right;">S. マウドゥディー (パキスタン) の活動</p>			
<p><u>委任統治体制 (1920-45)</u></p> <p>ハサン・バンナーにより「<u>ムスリム同胞団</u>」設立 (1928)</p> <p>イスラエル独立と中東紛争拡大 (1948)</p> <p>バンナー暗殺 (1949)</p> <p><u>アラブ・ナショナリズム (1956-1979)</u></p> <p>サイイド・クトゥブ死刑に (1966)</p> <p>サウジアラビアのイスラーム世界への援助拡大 (モスク・イスラーム教育など)</p> <p>サダト大統領暗殺 (1981) (「ジハード団」による)</p> <p>ベイルート米大使館／米海兵隊基地 (シア派系グループの自爆テロ) (1983/03/10)</p> <p><u>湾岸戦争 (1991)</u></p> <p>ルクソール事件 (1997)</p> <p><u>イラク戦争 (2003)</u></p> <p>イラクの混乱 (国内対立が IS 樹立の一因に)</p> <p>アラブの春 (2010-11)</p> <p>シリアの混乱 (内戦が IS 勢力拡大の呼び水に)</p> <p><u>IS カリフ国成立宣言 (2014)</u></p>	<p>カリフ制の廃止 (1923)</p> <p>エルバカン福祉党政権 (1996-98)</p> <p>エルドアン公正発展党政権 (2003)</p>	<p>イスラーム革命政権 (1979) (ホメイニー「法学者の統治論」カリフ制復活は主張せず)</p>	<p><u>アフガン戦争 (1978-89) (タリバーン、アルカーイダ台頭の契機)</u></p> <p><u>ボスニア紛争 (1992)・チェチェン紛争 (1994-96)</u></p> <p>同時多発テロ (2001)</p> <p>パリ・テロ事件 (2015)</p>

## 註

- 1) 日本語では当初「イスラーム国」との名称が用いられていたが政府はISILの略称を使用するようになっていし、メディアはISISやISの表現を使うことが増えている。これは、あまりに過激なこのグループがイスラーム一般のイメージを傷つけることや「国」という呼称を繰り返し使用することがこのグループの既成事実化に繋がるのではないかと懸念に基づいているものと思われる。現地のアラブ諸国では専らDAESHダーエシュと呼ばれている。
- 2) ヤジード教(ヤジディー)は一神教であり、ゾロアスター教とメソポタミアの伝統儀式が入り混じるほか、キリスト教、ユダヤ教、スーフィー、イスラームなどの影響を受けており、主にイラク北部に居住するクルド人でこれを信奉する者が多い。
- 3) イスラームにおいて初期イスラーム史において「移住」は宗教的に重要な意味を持つが、これは2.(3)で触れる。
- 4) コペンハーゲン学派の「セキュリタイゼーション」*securitization*をめぐる議論では、国家アクターが主題を「安全」の問題に変容させるプロセスであり、安全の名目で驚くほどの手段の使用を可能にする極端な方向への政治化のことを意味する。典型的には安全に関する議論の中で、たとえテロリズムによるより多くの人々が交通事故や予防可能な病気によって死亡する可能性があっても、どのようにテロリズムが最優先事項にされるのかが例として挙げられる。「セキュリタイゼーション」研究は、誰が(セキュリタイゼーション・アクター)で、どのような問題について(脅威)、誰に対して(指示対象)、なぜ、どのような結果を伴って、どのような条件の下にそれを行っているか理解しようとする。  
Barry Buzan, Ole Wæver, and Jaap de Wilde, *Security: A New Framework for Analysis* (Boulder: Lynne Rienner Publishers, 1998), p. 25.
- 5) 連合国暫定当局 Coalition Provisional Authority (CPA) は、戦争直後の米国防総省管轄下の復興人道支援室ORHAを引き継いで、アメリカ軍を中心としてイラクの政府体制を再建することを目的とし、元バアス党員全員の公職追放を実施した。
- 6) 宗教・宗派的に多面的な中東の社会では、諸集団間の日常的な対立が回避されてきたが、構造的な政治変動や大きな政治・社会的事件を契機に一旦、対立点が宗派と結び付けられて認識されるとそれがシンボル化され宗派対立に転化すると、本来対立点がずれているだけに、解決がより困難になる。
- 7) ヨルダン生まれ。本名はアフマド・ファディール・アン・ナザール・アル・ハラールイラと言われている。ヨルダンの有力部族バニーハサン族に属する貧困な家庭に生まれ、1980年代に犯罪を起こして服役を経験し、そこでイスラーム主義に触れ、アフガニスタンに渡った。
- 8) イラクの内政の現状については、山尾に詳しい。山尾大「イラク——民主化の蹉跎と宗派対立という亡霊——」(青山弘之『「アラブの心臓」に何が起きているのか』岩波書店2014)
- 9) シリアにおいても、スンニー派の多い地域(ラッカ、アレッポ、ラタキア、ダマスクス、ホムス、ハマー近郊)に勢力を伸ばした。N. Ibrahim, H. Annajar, *Daish: al-Sikkīn allatī tadhbah al-islam*, al-qahirah, 2015
- 10) ヌスラ戦線 Jabhat al-Nusra li-Ahal Sham は、シリアおよびレバノンにおけるサラフィー・ジハード主義のスンニー派武装組織であり、アルカーイダの強い影響下にあつて、シリア内戦ではアサド政権に対抗する立場をとる。欧米諸国はテログループと位置付けている。
- 11) 2014年6月29日、アブー・ムハンマド・アドナーニー、“This is the Promise of God”
- 12) <http://www.lettertobaghdadi.com/> スンニー派の最高学府エジプトのアズハル機構の法学者は「カリフ制は暴力で再興できない。国を占領し、住民を殺戮するのは、イスラーム国家ではなくテロリストの行為だ」と非難

- した。自らもカリフ制の復活を主張する有力イスラーム法学者ユーセフ・カラダーウィーは、「カリフ制の再興はわれわれが皆、待ち望んでいることだ」としつつも、「残虐非道な行為と過激な思想で知られるグループによるカリフ任命は厳密なシャリーアの解釈によれば、まったく無効である」と批判した。また、アルカーイダ本部やシリアのヌスラ戦線もイスラームカリフ国の成立を受け入れていない。
- 13) 2015年8月末～9月のヨルダン・エジプトでの聞き取り調査。
  - 14) イランや厳格なイスラーム法学派の影響の強いサウジアラビアではこの刑が実施されることがあるが、全ての当該のケースにこれが実施されるわけではなく、当局による「見せしめ」的な場合にまれに実施されることが多い。これらの国においても、実際にはハッド刑以外の犯罪に適用されるターズール刑を適用し5年以下の懲役に科すことに変えることが多く、ハッド刑の実施自体、縮小傾向にある。
  - 15) イスラーム圏でもトルコ、イラン、マシュリク、そしてマグリブのアラブ諸国は、近代化に伴う世俗主義の影響によって比較的早く廃止され、保守的なサウジアラビアでも1962年当時首相であったファイサル国王によって出された内政基本政策の中に奴隷制度の廃止とすべての奴隷の解放が明示された。
  - 16) 「イスラーム世界」に相当する概念であり、イスラーム法（シャリーア）が施行される空間を意味する。イスラーム法が施行されず混乱に満ちているのが「戦争の家」である。但し「平和の家」の空間の中にも異教徒の存在は想定されており、シャリーアにはそれへの対応も規定されている。この「平和の家」の中における、異教徒の極端な排除・迫害がISの特殊性であり、イスラーム諸国により運営されているOIC（イスラーム諸国会議機構）がISの行動をテロリストのものと断罪する根拠となっている。
  - 17) C. M. Blanchard and C. E. Humud, *Congressional Research Service: The "Islamic State" and U.S. Policy*, Nov. 18, 2015, pp. 4-5 なお、ISに同調する組織としてはエジプトの「イスラーム国シナイ州」、サウジアラビアの「イスラーム国ナジド／ハラマイン／ヒジャーズ州」、リビアの「イスラーム国タラブルス／バルカー／フェッザン州」、ナイジェリアの「イスラーム国西アフリカ州」、アフガニスタン・パキスタンの「イスラーム国ホラサン州」、イエメンの「イスラーム国イエメン・バイダー・アデン＝アビアン・シャブワ州」などがある。いずれもIS国家の一部という体裁の組織名となっている。
  - 18) 保坂「イスラーム国をめぐる諸問題」（2014年12月4日日本記者クラブ報告資料）JIMEより、一部改変
  - 19) 西欧に侵略されるなど、弱体化の著しいイスラーム世界の強化のために、まずイスラーム初期の先人サラフの時代の精神を取り戻すためのイスラーム純化運動を目指す運動。思想的ルーツとしては13-14世紀に活躍したハンバリー派法学者のイブン・タイミーヤにあると考えられているが、エジプト出身のムハンマド・アブドゥー（1845-1905）、シリア出身のラシード・リダー（1865-1935）、が代表的思想家であり、シャリーアに基づく国家建設や西欧の影響からの脱却を目指しつつも、非暴力的であり、イスラーム的価値と矛盾しない西欧の制度等については許容する姿勢も持っていた。ムスリム同胞団やワッハーブ派（後述）も、思想的にはこの系列にいれる場合があるが、特に後者は行動主義的傾向や極端に教条的な傾向から区別する場合が多い。
  - 20) これは「イジュティハードの門の閉鎖」として知られるが、一部の例外を除いてスンニー派の法学派においてはこれによって、19世紀のイスラームのルネッサンスである改革運動が始まるまで、カリフの権威の凋落とも相まって、イスラームの停滞と政治からの遊離を招いた（井筒俊彦『イスラーム文化』岩波1991）。
  - 21) 保坂、前掲書。
  - 22) ハサン・バンナー（1906-49）は、ムスリム同胞団の創始者として知られる。ダールウルーム（高等師範学校）卒業後、彼はイスマイリーヤで小学校教師になったが、英国による植民地化の影響に衝撃を受け1928年にイスラームによる社会改革のための組織を立ち上げ、40年代にはメンバーは50万人に達し、周辺のアラブ諸国に支部も作られた。



- 23) サイド・クトゥブ（1906-66）はエジプトのイスラーム主義者・作家。バンナーと同じ高等師範学校を出ると、教員や教育省の役人を務めた。渡米経験から、アメリカ文明が物質主義的で暴力的であると批判。ムスリムの殉教を支持し、今日のイスラーム過激派に多大な影響を及ぼしている。
- 24) 外務省「アフガニスタンの現状と問題」<http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/afghanistan/genjo.html> 引用 20160106
- 25) ヒジュラ（「聖遷」）として、イスラーム史の中で最も重要な事件とされ、イスラーム暦の元年になっている。
- 26) 例えば、2014年シリア戦線においてISの指導者ムハンマド・サムーフ・アルラシードは、声明の中で「（他のムスリム集団に対し）タクフィールを乱用すべきではない」とし、それは「相手と戦うために相手をタクフィールすると、われわれが嫌悪しているハリジー派と同じになってしまうからである」と警告した。C. M. Blanchard 前掲資料、p. 12。なおハリジー派とは、正統カリフのアリーが、反対派のカリフ候補者のムーウィヤと妥協しようとしたことに反対し立ち上げた一派。スンニー派と対立し急進派とみなされた。
- 27) テロに対抗する手段としての「ピンポイント」の空爆は、正確性によって一般には限定的手段というイメージがあるが、誤爆によらずとも多くの民間人の犠牲者を伴っている。これが、主な攻撃者である米国への反発を呼ぶこともある。ロサンゼルス・タイムズ（2002年6月2日）によると、2001年10月7日から2002年2月28日の間に、1,067～1,201人のアフガニスタンの民間人が空爆により死亡したという米・英・パキスタンでの報道があった。THE UNTOLD WAR ‘The Americans . . . They Just Drop Their Bombs and Leave’
- 28) ロシアにおいてはチェチェン問題をはじめイスラーム教徒の多いロシア連邦内のカフカース地方の自治や自律性をめぐる問題、中国においては新疆・ウイグル自治区には多くのイスラーム教徒が居住することから、宗教問題そしてセキュリティ問題と結びつけられて問題化する可能性がある。
- 29) 撃墜問題に関しては、双方の主張が食い違っており、真相は明確にはなっていないが、すでに数ヶ月前からロシアのトルコ領空侵犯に関してはNATOや米国も警告していたことは知られている。ロシア側はトルコがISから石油を密輸しているとして、ISとトルコ政府とのつながりによる「陰謀」説を唱えているが、トルコ側に密輸業者がいることが事実としても、国ぐるみの陰謀を撃墜に結びつけることには無理があるとの指摘もある（英チャタムハウスのV. マーセル）。<http://time.com/4132346/turkey-isis-oil/> 2016/01/
- 30) ここでは、資本主義システムの世界的拡大とそれに伴う世界の階層化を伴う一体化の局面をイメージしており、その中にテロ現象を含むさまざまな問題群の構造的要因を探ることを意識している。構造的要因は具体的には植民地主義による脆弱な国家群国家群の形成、20世紀末の冷戦崩壊とグローバル市場の形成基準への対応の外的要請、内からの改革要請に対する再調整と関わっている。

## The Rise of IS and the Issue of ‘Islam Politics’

Yoshiyuki KITAZAWA

**Abstract**

While the ‘Arab Spring’ influenced much on the international relations in the Middle East, the rise of Islamic State (IS) is affecting the situations of international society diversely. No one in international society, nor in Islamic World, would stand up for this syndicate except for its followers. This is because IS fails to have general tolerance and flexibility of Islam and is dominated by dogmatism and compulsion at all times. However, it would be too optimistic to expect a final solution through annihilation of this entity militarily, which is a difficult task in itself. We are required to make effort to find structural causes which would cause to appear terrorist and their sympathizers. It is necessary for us not to fall in a trap of essentialism that tends to attribute everything to Islam and culture and so on, which of course are important elements to the issue of extremism when we try to study the background of Jihadists. And we should study this issue under the broader understanding of globalization, through which I imagine global extension of capitalism, which contained a process of global stratification that led to poverty, inequality and terrorism etc. It is expected that we should try to make research works not only through the perspectives of developed world but also through that of local and international organizations such as LAS and OIC.